

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	溝川 藍
論文題目	感情表出の調整と他者の心の理解に関する発達的研究		

(論文内容の要旨)

本論文は、幼児期から児童期にかけての感情表出の調整、たとえば嘘泣きのような「見かけの感情」の表出に関する理解が心の理論 (theory of mind) ——人間の行動の背後に信念、願望、意図等の心の働きがあることを理解する能力——とどのように関連するかについて、発達心理学的に検討を行ったものである。本論文は、7つの章からなり、8つの研究を取り上げている。

第1章では、見かけの感情と本当の感情の理解の発達についての先行研究を概観し、子どもの感情表出の調整に関する理解を本論文のテーマに設定した。

第2章の研究1では、幼児 (4、6歳児40名対象；個別実験) を対象に、偽りの悲しみ表出の理解が可能になる時期について検討した。その結果、他者の注意をひく等の自己防衛的動機による偽りの悲しみ表出の理解は幼児期に発達すること、偽りの悲しみ表出の理解は偽りの喜び表出の理解よりも遅れて発達すること、他者の感情を守る等の向社会的動機による偽りの悲しみ表出の理解は幼児期に発達するものの幼児期後期の子どもにもなお難しいことなどが示された。

第3章の研究2 (4、5、6歳児69名対象；個別実験) と研究3 (小学生1～6年生 525名対象；質問紙形式による集団実験) では、見かけの泣きの理解と心の理論の獲得との関連について検討した。研究2の結果、見かけの泣きが本当の泣きとは異なることの理解は、4歳から6歳の間に発達し、その発達は心の理論とも関連することが示された。また、研究3の結果、見かけの泣きが他者に誤った信念を抱かせる (本当に泣いていると思込ませる) ことの理解は小学1年生から4年生の間に発達し、その発達は二次的誤信念の理解の発達と関連することが示された。

第4章の研究4では、幼児 (4、5、6歳児65名対象；個別実験) の見かけのネガティブ感情表出と本当の表出を区別する能力について検討した。この研究の結果から、ふり遊び文脈においては、幼児は早期から見かけの泣きと本当の泣きを区別できることが示された。研究5 (4、5、6歳児67名対象；個別実験) では、ふり遊び文脈における見かけの怒りの理解について検討した。研究の結果から、5歳児は、ふり遊び文脈において、見かけの泣きと本当の泣きを区別することができるが、見かけの怒り (怒るふり) については「本当の怒り」であると判断してしまうことが明らかになった。

(続紙 2)

第5章の研究6(3～6歳児62名対象;個別面接調査)では、幼児が対人関係の中で嘘泣きの表出がどのように働くと認識しているかについて検討した。その結果、嘘泣きと本当の泣きを区別できる子どもには、嘘泣きが「受け手の向社会的行動を導く」と判断する者と「受け手の否定的・非関与的行動を導く」と判断する者がいることが明らかになった。研究7(4、5歳児60名対象;個別実験)では、幼児がどのような場面での嘘泣きが受け手の向社会的行動を引き出すと捉えているかを調べた。その結果、4歳児は被害あり状況での嘘泣きが被害なし状況での嘘泣きよりも他者の向社会的行動を導くと判断し、5歳児はどちらの状況での嘘泣きも同じ程度に向社会的行動を導くと判断することが示された。

第6章の研究8(5、6歳児102名対象;個別実験)では、心的状態の理解(心の理論課題および隠された感情課題)と園での社会的相互作用(クラス担任12名を対象とする担当児の園での行動に関する16項目の質問紙調査)との関連について検討した。社会的相互作用の項目について因子分析を行なった結果、「同情・共感」「仲間関係」「仲間からの受容」の3因子に分かれることが示された。月齢、性別、言語能力を統制した偏相関分析の結果、心の理論の理解は「同情・共感」因子及び「仲間からの受容」因子との間に有意な正の偏相関があり、心の理論の理解が5、6歳児の円滑な社会的相互作用構築の基盤となっていることが示された。

第7章「総合考察」では、研究1から研究8の結果をまとめる発達モデルを構成し、本研究が発達心理学研究に与える示唆と今後の展望について考察した。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、幼児期から児童期にかけての感情表出の調整に関する理解の発達、特に見かけの感情表出に関する理解の発達過程を、他者の心の理解（いわゆる心の理論）の発達と関連づけながら、明らかにしようとするものである。論者は、見かけの感情表出の中でも、子どもの生来の行動である「泣き」という表出形態に研究の主たる焦点をしばり——研究5のみ例外的に「見かけの怒り」を扱っている——、「嘘泣き」の場面における見かけの感情表出の理解過程と、その理解に関わる認知能力との関連性を探ることを目的とし、心理学の実験法（研究1、研究2、研究4、研究5、研究7、研究8）、面接調査法（研究6）、質問紙法（研究3、研究8）という3種類の方法論を駆使しつつ、問題を多角的に検討することによって、幼児と児童における感情表出の調整に関する理解の発達過程を明らかにしたものである。

本論文において、論者は8つの研究を取り上げ、それを7つの章にまとめているが、この8つの研究を通じて、個別調査として幼児をのべ465名、集団調査として小学生を525名、合計すると1,000名近い子どもたちから貴重なデータを集め、的確な統計的分析を行っている点が高く評価される。特に、幼児対象の研究と児童対象の研究の両方を実施することは、発達に対する幅広い視野と方法論的洗練が必要とされるが、研究2と研究3を通じて、幼児期から児童期にかけての見かけの泣きの理解と心の理論の獲得との関連に関する方法論的に一貫し連続するデータを論者が示しえたことは大変意義深い。

論者は、嘘泣きの理解を調べるオリジナルな「泣き課題」および「泣きの機能課題」や、同様の趣旨の「怒り表出課題」を新たに考案する一方、英国ケンブリッジ大学のクレア・ヒューズ博士の国際共同研究チーム（参加国は、イギリス、イタリア、オーストラリア、日本）にその一員として討議に参加し、その討議の結果を研究8における新しい課題の開発ならびに既存の課題の洗練に生かしており、研究水準を国際的に通用する高いものとしている。

また、研究8では、心的状態の理解（心の理論課題および隠された感情課題）に関する5～6歳の園児の成績と、園児の日常的行動に関するクラス担任を対象とする質問紙調査から得られた社会的相互作用のあり方（特に「同情・共感」因子と「仲間からの受容」因子）との関連性について明らかにした点も高く評価された。

(続紙 4)

本論文の8つの研究を通じて明らかになったことは、4歳児は人が内的な感情を調整して表出することを未だ理解しない段階にあること、6歳児はそのことは理解し始めるが見かけの感情表出が他者の信念に与える影響については未だ理解しないこと、10歳児はこの両方を理解するようになること、という3段階の発達過程であり、この知見は子どもたちに対する保育と教育の指針を検討するうえでも役立つ大変重要な成果である

他方、本研究に対して、次のような問題点が指摘された。

(1) 「認知」と「感情」の関係や、「感情」と「情動」の区別など、本論文の中心的概念の整理をさらに綿密にする余地があること。

(2) 近年著しい感情に関する進化学ならびに脳科学の知見も参照することが望まれること。

(3) 第1章および第7章で示された発達のモデルの論拠と解釈の妥当性、その理論的インパクトなどについて、さらに深い議論が望まれること。

その他のことがらも含めて、指摘された問題は本研究の価値を根本的に減ずるものとは言えない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成23年2月18日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降